

2018/05/13

「さばいてはならない」

■なぜさばいてはいけないか？

「さばいてはいけません。さばかれたいからです。」(マタイ 7:1)

「さばく」という言葉は、ギリシャ語の「クリノー」で、本来の意味は「分ける」とか「区別する」という意味です。つまり、聖書は、「互いに互いを区別してはいけない」と教えているのです。

「怒ってはならない」「赦しなさい」「愛しなさい」……これらの聖書の教えは、すべて「人を区別してはいけない」ということに集約されます。「区別する」とは、誰が上で誰が下かとか、人を見下したり、意地悪したりすることです。なぜ、聖書は、人を区別してはいけないと教えているのでしょうか。

■第一の理由

「あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」(マタイ 7:2)

人間は予定していたことがうまくいかないと、腹を立て、人をさばきたくなるものです。しかし、それは全部自分に跳ね返ってきて、自分自身も同じようにさばかれる時がやって来ます。自分自身がさばかれる立場になってしまいますから、私たちは、人をさばくべきではありません。

■第二の理由

「また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。」

(マタイ 7:3-4)

人をさばくと、私たちは、自分の罪に気づかなくなります。それは、神との関係を失うこととなります。

イエス様は、十字架に架かる前に、弟子の足を洗ってくださいました。一日中砂の中を歩

き回って汚れた足を、主が洗ってくださったのは、足の汚れを罪にたとえて、イエス様が罪をきよめてくださることを教えるためです。

「イエス様に、汚い自分の足を洗ってもらうなんて、申し訳ないからやめてください。」と言うペテロに対して、イエス様は「もし、足を洗わないのであれば、私とあなたは何の関係もありません。」と、言われました。つまり、私が罪を洗い流さないのであれば、私とあなたには何の関係もないと言われたのです。

その言葉を聞いたペテロは、「それでは、足だけではなく、私の全部を洗ってください！」と頼みました。するとイエス様は、「足だけでよいのです。あなたは初めから聖いものですから、付いた泥だけ洗い流せばよいのです。」とお答えになりました。

神と私たちの関係は、罪を赦していただく関係です。しかし、罪に気づかなければ、神様との関係を築くことはできません。

イエス様は、ある時、取税人の祈りとパリサイ人の祈りのたとえ話をなさいました。その中でパリサイ人は、「私は献金もできて、断食もできて、感謝です。特に、この取税人のような罪人でないことを感謝します。」と祈りました。確かに取税人の行いは、悪いものです。しかし、取税人はそのことがわかった上で、ただ「神様、罪人の私をあわれんでください。」と祈りました。イエス・キリストは、この取税人の祈りを義とするとおっしゃったのです。

パリサイ人は、良い行いをしたら、神様との関係を築けると思いました。この世の宗教は、皆、そのように教えます。しかし、聖書は違います。「罪に気づき、その罪を神様のところに持って行きなさい。そうすれば神との関係を築くことができる」と教えています。私たちは、自分の罪に気づかなければ、神との関係を築くことも、神の愛を知ることもできません。

神の愛とは、私たちの罪を赦すことです。何かを頑張ってほめられたり、祈りを聞いてもらったりすることではありません。神様は、あなたがどんな罪人であっても、無条件であなたを愛します。その愛に触れた時、私たちの生き方は変わります。ありのままの自分が受け入れられ、自分のままで生きていけばよいことに気づく時、私たちは変わることができるのです。何かを頑張って、ほめられることでは、生き方を変えることはできず、そのような生き方は、かえって自分を追い込み、つらくさせることになります。

自分の罪に気づかなければ、何も始まりません。そもそも聖書が書かれた目的は、すべての人を罪の下に閉じ込めるためなのです。

「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」(ガラテヤ 3:22)

罪に気づいたら、神の助けを乞うしかありません。聖書が、私たちに罪を気づかせようとするのは、そうすれば、神との関係を築くことができるからです。

イエス様は、罪人を「どうぞいらっしゃい」と招き、正しいと言われている人は来なくてよいと言われました。私は医者であるから、私は病人が来るところであって、健康な人は来なくてもよいと言われたのです。

人をさばくと、何か自分がその人よりも偉いような、正しいような気になって気分がいい

ものです。自分は価値ある人間だと確認するために、私たちは、身近な人間関係やマスコミを利用して、人をさばくことが大好きです。しかし、さばくと、自分の罪に気がつくことができません。その結果、神の愛に気づくことができないという最悪の事態に陥ります。

■ 第三の理由

「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。」(マタイ 5:21-22)

聖書は、人にばか者と言ったり、腹を立てたり、人をさばく者は、殺人と同じ罪を犯していると教えています。この言葉は、20世紀になって、心理学の発展により、実は単なる比喻ではないことがわかってきました。

心理学における20世紀最大の発見が、フロイトによる潜在意識(無意識)の発見です。私たちの行動の多くは、自分の意識できないところで決定されている、という潜在意識については、いくつかの立場がありますが、全人類の潜在意識の中に共通の思いがあることは認められています。このことから、人はひとつのいのちでつながれているという聖書の教えが真理であることを説明することができます。

聖書は、人は神のいのちによって造られ、一人一人はキリストのからだの部分であると教えています。もし、ひとつのいのちでつながれ、キリストのからだを共有している手と足が、お互いを区別して分裂させたら、体全体が壊れてしまいます。聖書が教える「死」とは、神と分離することです。つまり、「区別」は、死を意味するのです。人をさばくこと、すなわち区別することは殺人と同じだという聖書の教えは、象徴的な比喻ではなく、実際の話だということなのです。

「しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。」

(I コリント 12:20)

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」

(I コリント 12:27)

人はみな、異なる働きをするために、それぞれに異なる能力が与えられています。私たちは、運動ができるとか、頭がいいとか、そのような基準で人を見て、すごいとか、すごくないとか、人を判断し、互いの働きを見て、それがその人の価値だと思っています。しかし、聖書は、それぞれの能力が違うのは、価値の違いではなく、体の器官として必要な働きをするためであり、互いに助け合う関係だからだと教えています。ですから、互いを区別するこ

とは、根本的に間違っているのです。働きの違いは価値の違いではなく、キリストのからだを建てあげるためのものです。

聖書が、「さばいてはいけない」「怒らない」「赦しなさい」等、「区別してはいけない」と教えているのは、私たちがみなつながったものとして造られており、誰が偉いとか価値の差は全くないからです。イエス様はそのことを教えるために、当時最も価値がある人物だと人々から思われていたバプテスマのヨハネを例に挙げて、「天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。」と語っておられます。人々が、最も小さく価値がないと思っている人の方がバプテスマのヨハネよりも偉大だとイエス様が言われたのは、それぞれが助け合ってキリストのからだを建てあげるのが神の国であり、上も下もないからです。

私たちは人と自分を比べて、働きが少ないとか、価値がないとか、思ったりしたことはないでしょうか。しかし、それぞれが異なる働きをしているのは、キリストのからだを建てあげるために必要だからです。私たちは、一つのいのちでつながっているのですから、キリストのからだを区別してはいけないのです。これが、20世紀になって心理学の分野でユングやフロイトが明らかにしたことからわかることです。

心理学では、人間は、愛他行動というものを取ることが知られています。これは、目の前の人突然危険に陥ったら、誰もがとっさに助けようとする行動に出るといえるものです。なぜ見知らぬ人を助けようとするのか、それは私たちのいのちがつながっているからとしか説明が付きません。表現の違いはあっても、私たちのいのちがつながっているのは、心理学上では明確な事実です。それをどのように理解するかは、立場によって異なりますが、聖書は、その理由を、神のいのちによってつながっているからだ教えています。だから、お互いをさばいて区別することは殺人と同じであり、自殺と同じなのです。

イエス・キリストは、一度も罪人を裁きませんでした。それは、自分を殺そうとする人に対しても同様で、全く区別なさいませんでした。イエス様は、すべての人が一つのいのちでつながっていることをご存知だったからです。

指を切れば、痛みが体全体に跳ね返ってくるように、人をさばけば、自分自身に痛みが帰ってきます。人を区別することは、人を殺すことであり、それは自分自身を殺すことである、このことがわかると、誰のこともさばくことができなくなるものです。

イエス様は、十字架に架かる前、父なる神とご自身が一つであるように、人々が一つとなることができるように、祈っておられます。三位一体の神が一つであるように、私たちも互いに祈り合い、赦し、受け入れ、助け合って、一つとなることができるのです。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」(マタイ 5:3)

イエス様は、初めて公で語られた山上の垂訓から、このことを一貫して語っておられます。「貧しい」とは、恐れ縮こまっている状態のことで、物乞いするしかない状態、心が苦しくて仕方がない状態の人を意味します。私たちの心が苦しくなる原因は、病気、災害等いろいろありますが、その筆頭は罪責感によるものです。つまり、イエス様は、おびえて縮こまり、神に助けを乞うしかない状態の罪人こそ、天国に近い、天国に行くべきだと言われたのです。

この世は、「物乞いするしかない人は、哀れでかわいそうだ」、「生きていても価値がない」などと考えるものですが、イエス様は、むしろ、差別されるような人ほど、宝であり、幸いだと語ることで、すべての人を愛しているというメッセージを伝えようとなさっておられます。私たちが、ばか者と言ってしまったり、さばいたりして、人を区別するなら、それはすべて自分に帰ってきます。絶対に人を区別してはならないのです。それは、私たちが、キリストのからだを共有しているからです。

人はみな、自分では意識できない共通の意識を持っています。それは、キリストのからだを共有する仲間だからです。互いが必要な人、大切な人だということを覚えて、人を区別して見下したりしないようにしましょう。